

S2

ろう者手話学習者と聴者手話学習者：
第一モード第二言語話者と第二モード第二言語話者の語りの比較

デボラ・チェン=ピクラー、シェーン・ブラウ
(ギャローデット大学 [アメリカ])

要旨

序：本研究は、アメリカ手話を第二言語として学んでいる人のうち、ろう者である人と聴者である人とを比較するものである。ろう者である調査協力者は、日本手話を第一言語とする人たちで、それゆえ「第一モード第二言語」学習者と言える。第一モード第二言語学習は、国際ろうコミュニティにおいては珍しくなくなってきたが、その第二言語学習の過程はこれまで全くと言ってよいほど記述されてこなかった。一方、調査協力者のうち聴者である人たちは、アメリカ手話を学習する際、同時に手話の伝達モードを初めて経験するのであるから、「第二モード第二言語」学習者であると言える。この二つのグループに対して、本研究では、エリシテーションによる短い語りで用いられる節の構造と視点を記述することを当面の目標とする。本研究のような、第一モード第二言語学習者と第二モード第二言語学習者を直接に対照する研究は、第二言語学習に際して伝達モードが果たす役割を調査する新たな機会となる。

調査手法：調査協力者には、まず、一人ないし二人の登場人物が単純な他動詞的ないし複他動詞的動作を行なっている映像を見てもらい、そして、その出来事をアメリカ手話で表現してもらった。調査協力者のうち四人は、日本手話を第一言語とするろう者、アメリカ手話の運用能力はまちまちである。残る四人の調査協力者は、二週間のアメリカ手話イマージョン教育を受けてすぐの第二モード第二言語学習者である。比較のため、日本人のろう者調査協力者には同様の語りを日本手話でも行なってもらい、聴者調査協力者にはアメリカ手話の学習を始める前と始めた後の二度、ジェスチャーによる語りを行なってもらった。カメラに視線を向けて発せられた手話発話は「観察者の視点」、カメラから視線を外して発せられた手話発話は「登場人物の視点」として扱った (McNeill 1992; Cormier et al. 2012)。

結果：実験刺激は、もともと単純な構造の節（たとえば「女の子が男の子を押す」や「男の子が iPad を盗む」のように）で記述できるよう作ってあったが、ろう者調査協力者は、その出来事をアメリカ手話で語る際に複数の節を用い、まず背景状況を述べてから出来事を語るが多かった。聴者調査協力者も、ジェスチャー

一による語りでは複数の節を用いていたが、二週間のアメリカ手話講座を終えた後では、節をひとつだけ用いるようになった。その際、語順はほぼ SVO であったが、それ以外の語順も多少は観察された。視点に関しては、四人のろう者調査協力者は驚くほど共通しており、観察者視点と抑制的な登場人物視点とを頻繁に行き来していた。これは日本手話での語りでも見られたものである。これとは対照的に、聴者調査協力者が行うアメリカ手話の語りは、ほぼ観察者視点のみで発せられた(図1)。しかし、これと同じ時点で収録したジェスチャーの語りのほうは、登場人物の視点を大いに使い続けていた。この結果のひとつの解釈として、登場人物視点は、第二モード第二言語学習者にとってジェスチャー戦略としてすでに存在するものの未熟であり、二週間のアメリカ手話講座だけではこの戦略をアメリカ手話で活用するには至らないのだと言えるかもしれない。これからの手話教授法は、聴者学習者がジェスチャーに関して持っている直感をうまく活用することで、登場人物視点と観察者視点を自然に交替させながら語りを発する力をつけさせる方法を探ることができるだろう。

例：

図(1)：二週間のアメリカ手話講座を経た第二モード第二言語学習者によるアメリカ手話の語り 「男の人が男の子を助ける」



図(2)：二週間のアメリカ手話講座を経た第二モード第二言語学習者によるジェスチャー 「女の人が男の子に大きな本をあげる」



チェン=ピクラー、ブラウ：ろう者手話学習者と聴者手話学習者：
第一モード第二言語話者と第二モード第二言語話者の語りの比較

参考文献

Cormier et al. 2012. Lexicalisation and De-lexicalisation Processes in Sign Languages: Comparing Depicting Constructions and Viewpoint Gestures. *Language & Communication* 32: 329–348.